成人式を考える

研究開発部
北村 安樹子

＜成人の日と成人式＞

今年も新しい1年がスタートした。今年度中に20歳の誕生日を迎える若者にとっては、大人への仲間入りを果たす年でもある。(旧)総務庁の推計によれば、2001年の新成人はおよそ157万人で、総人口の1.24%を占めた(図表1)。

かつては成人の日といえば1月15日であったが、いわゆるハッピーマンデー法が施行された2000年以降は、1月の第2月曜日となった。今年は14日の月曜日がそれにあたる。地元を離れた若者が参加しやすいようにと、成人式を別の日に実施するところもあるが、最も多くの地域で成人式が行われるのが成人の日である。例えば昨年の場合、全国の市町村全体の43%が、成人の日にあたる1月8日に式を開催している(文部科学省『平成12年度「成人式」実施状況調査結果』2001年4月)。

＜成人式をめぐる議論＞

昨年は、成人式での新成人の振る舞いやそれに対する行政の対応が、例年にも増して大きな話題となった。マスコミの報道姿勢にも問題はあったのだが、これを受けて文部科学省は、初めて全国の成人式に関する先の実態調査を行った。

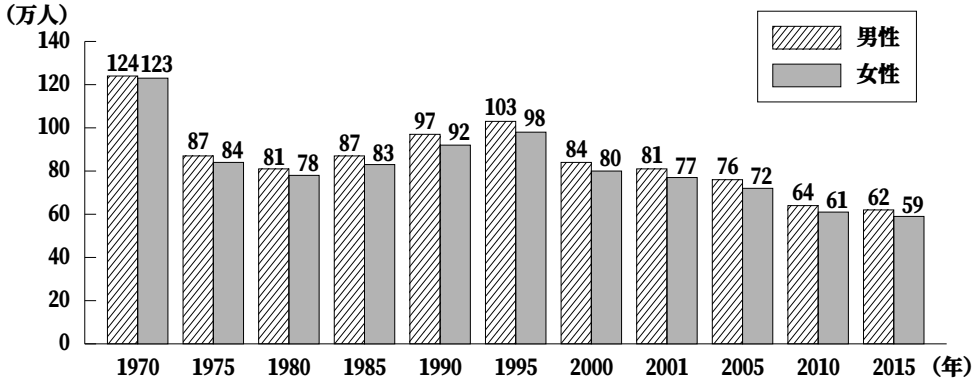
この調査によれば、成人式の主な行事内容としては「式典」が95%を占め、「記念撮影」(64%)、「アトラクション」(41%)がこれに続いている(図表2)。最近は若者の関心を高めようと式の内容も多様化しているといわれるが、この結果をみる限り、ほとんどの場合、メインとなる行事は記念の式典であることがわかる。今年は昨年の議論を踏まえて、成人式のあり方について見直しを進めた市町村も多くみられる。式の内容だけではなく、式の位置づけそのものを再考し、新成人が主体的に参加できるよう、若者を中心とする実行委員会などを設けたところも多い。

＜成人式の行方＞

ところで、若者たち自身は、成人式についてどのように考えているのだろうか。中部地方にある企業の新入社員を対象に行われた調査によれば、成人式への出席者は男性の約8割、女性の約9割を占め、出席状況はおおむね良好である(図表3)。欠席理由をみても、「出席は任意であるし、面倒だから」(26.8%)「特に会いたい人もいなかったから」(14.5%)などの否定的な理由より、「地元を離れていたので行けなかった」(44.2%)など、やむを得ず行けなかったという回答が多くなっている。一方、出席理由として最も多いのは「友人に会いたかったから」で、「記念なので出たいと思ったから」「出席するものだと思っていたから」などに比べてはるかに多い(図表4)。出席する若者にとっては、記念や慣例といった意味よりも、なつかしい友との再会の方が重要であることがわかる。

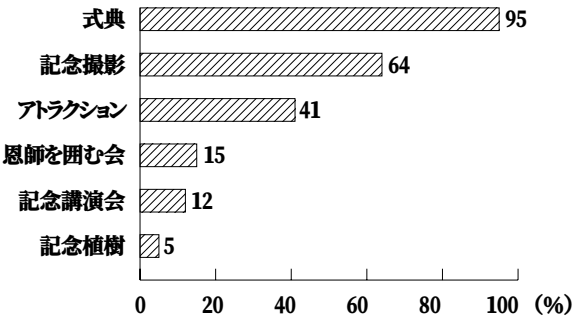
国民の祝日に関する法律によれば、成人の日は「大人になったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます」日とされている。しかし、祝われる側の青年には、成人の日が大人であることを自覚し、生きる決意を新たにする節目であるという認識は薄い。彼らを祝う側であるわれわれ大人たちも、形骸化する成人式の位置づけや成人の日の意義について、改めて考えてみる必要があるのではないか。

図表1　新成人人口の推移



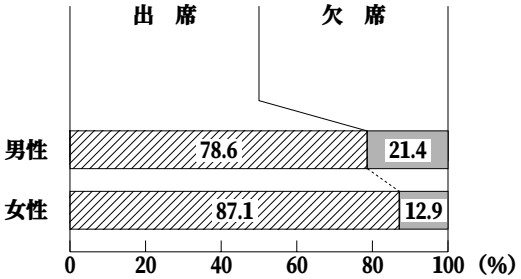
注1:2001年以前は、総務庁統計局『推計人口』。2005年以降は、国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口－平成9年1月推計』（中位推計）を基礎として統計局で算出。
注2:数値は万人単位に四捨五入してあるので、男女の合計は必ずしも男女計に一致しない。
資料:総務庁統計局『統計局インフォメーション』No.168　2000年12月

図表2　成人式の主な行事内容（複数回答）



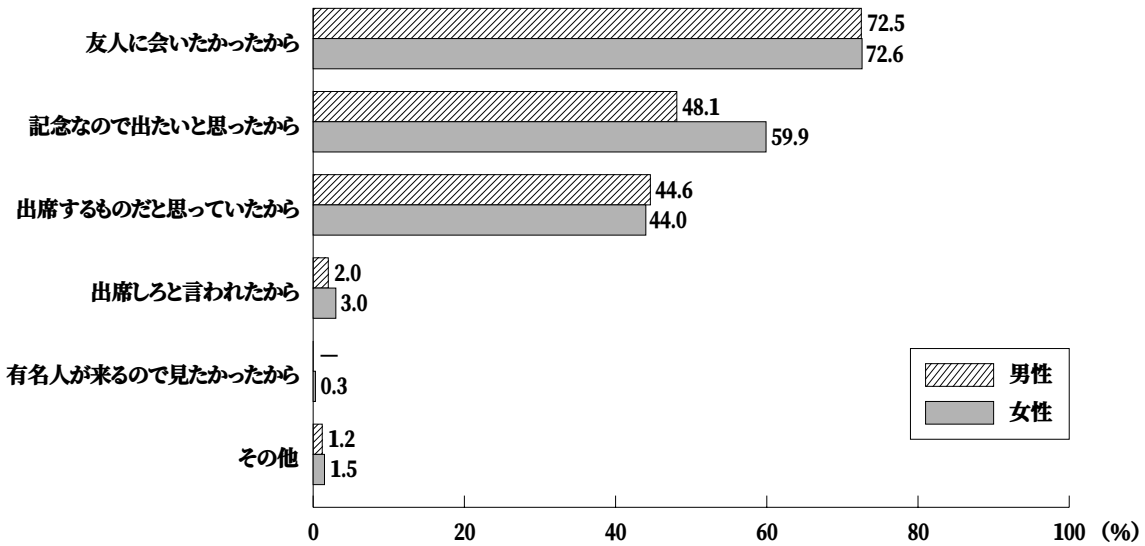
注:調査対象は全国の市町村。
　回答者は、成人式を開催した3,247市町村。
資料:文部科学省生涯学習政策局社会教育課
　『平成12年度「成人式」実施状況調査結果』2001年4月

図表3　成人式への出席状況



注:調査対象者は、大垣共立銀行の取引先企業（岐阜・愛知・三重・滋賀県所在）の新入社員1,302名。
　回答者は、このうちすでに成人式を迎えた825名。
資料:株式会社共立総合研究所
　『平成13年度　新入社員の意識調査結果』2001年5月

図表4　成人式への出席理由（複数回答）



注:回答者は、成人式に出席した681名
資料・注:図表3に同じ